

例であつた。

現在も軽いめまいは起こるが、めまい発作時および発作後には治療をうけない、ほぼ治癒の状態とみなせるものが4例あり、これを加えた38例(63.3%)はめまいに関しては一応治癒例と言えた。

残りの22例(36.7%)は以前とかわらないめまいが最近も起こる例であつた。

以上のアンケート調査によつて各症例におけるメニエール病の罹病期間が明らかとなつたので、昭和42年1月から45年12月までの4年間に行なつたメニエール病78例(再診を含む)における予後調査の結合と比較した。

6. Muscle embolization 施行後の巨大血管腫切除について

(形成外科)

○若松 信吾・上村 隆志・中谷 親弘・野崎 幹弘・久野 佑三・平山 峻

Muscle embolization は、1930年 Brooks らにより動脈静脈瘻の治療法として、始めて報告されたが、われわれは1歳6カ月の女児の左頸部に出現した巨大血管腫を摘出術施行前に、左外頸動脈より muscle embolization を行ない、出血を最小量におさえて摘出することに成功したので報告する。

患児は生下時、左鼻背部に小指頭大の赤色母斑が認められ、生後2週目より徐々に腫大隆起した。某大学病院受診、海綿状血管腫の診断により外科的に摘出不能のため放置する様にといわれたが、腫瘍は徐々に増大を続け、左下眼瞼、左鼻背および左頬部全体にわたり巨大化した。当科にて生後1年2カ月目に、左外頸動脈よりの muscle embolization および左右外頸動脈結紮術を施行した。施行前および施行後の頸動脈撮影像の比較によると明らかな腫瘍への main feeding artery の閉鎖が認められ、施行後3カ月目には腫瘍の縮小化および表面の色調の変化が見られ muscle embolization が効果を示したものと思われた。施行後4カ月目に表皮を含めて全切除術を行ない、欠損部に植皮術を行なつた。術後経過は良好である。手術時の出血量は290mlで、このような腫瘍の切除としては最小限の出血量と思われ、muscle embolization が著効を示したものと考えられる。

7. クロウン氏病の3例

(外科)

○桐田 孝史・白鳥 敏夫・鈴木 忠・倉光 秀麿・織畑 秀夫

われわれは最近2カ月間にイレウス(2例)および回

盲部腫瘍(1例)の術前診断にて開腹術を施行した、クローン氏病の3例を経験したので、教室例とあわせて、文献的考擦を加えて、報告した。当教室では、約16年間に14例のクローン氏病を経験した。

発生頻度は、諸家の報告と同じく20~30歳に過半数を認め、性差は認めなかつた。主訴は、腹痛、腹部腫瘍が大部分であつた。X線検査(バリウムによる造影)にて種々の特徴的所見が認められるが、本症例中、2例はイレウス症状強く、経口および注腸によるX線検査は不可能であつた。原因のはつきりしない現在、治療は、外科的療法に頼らざるを得ず、腸管切除が行なわれる。しかし、本症例中の1例の如く、全身状態が悪い患者に対しては、非切除で腸管吻合術、または腸瘻造設術が行なわれるべきである。

8. ビタミンK欠乏症によると思われる幼若乳児頭蓋内出血の2例

(小児科) ○杉山 啓子・川室 茂子・村上 文江・福山 幸夫

新生児メレナの時期をすぎた新生児後期から乳児期にかけての出血傾向の原因の一つとして、ビタミンK欠乏症が1960年代より報告されている。ビタミンK欠乏の原因としては母乳中ビタミンK不足が問題とされている。最近、著者らは母乳栄養児にみられたビタミンK欠乏によると思われる新生児後期の頭蓋内出血の2例を経験したので報告する。2例とも1カ月男児。満期産、正常分娩、正熟児、初発症状は第1例は採血部位からの持続性出血および痙攣。第2例は皮下血腫および痙攣である。神経学的合併症として、第1例は動眼・顔面神経麻痺、左痙攣直性片麻痺、第2例では落陽現象が存在した。腰椎穿刺および脳室穿刺で両例とも血性髄液が採取され、第一例においては左硬膜下穿刺で血液が採取された。血液学的検査では第一例において、トロンボテスト、部分トロンボプラスチン時間の異常値を示し、プロトロンビン依存性因子の活性低下が示唆された。両例とも血小板数、フィブリノーゲン値は正常であつた。治療として、輸血、ビタミンKの投与を行ない両例とも出血傾向は速やかに改善した。後遺症として脳室の著明な拡大及び脳萎縮をみたが、第2例では交通性水頭症と診断、第1例は水頭症の有無を現在検索中である。母乳栄養児に多く、健康に新生児期をすごした後におこる突然の強い出血傾向及び後遺症の重篤さから、今後予防的ビタミンKの投与は大いに検討されるべき問題であらう。

9. 多彩な神経症状を呈した SLE の1剖検例

(第2病院内科)

○目黒 雅俊・富田 崇敏・本多 祥之・
多賀谷 茂・熊田 徹平・原田 健司・
安倍 紀子・新井知恵子・小泉 澄子・
渡辺 晴雄

多彩な神経症状を呈して死亡した SLE (Systemic Lupus erythematoses) の1倍検例を報告した。症例は50歳女性、既往・家族歴に特記すべきものなく、昭和47年3月 *aropetia areata multiplex* で発症。経過中、典型的な蝶形紅斑と、ANF, ADNAE 陽性。血清補体価の低下があり、SLEと診断されている。昭和50年12月より感冒様症状、発赤腫脹を伴う関節痛出現。昭和51年1月20日入院。入院時、軽度の意識障害 (Delirium), 右半身、特に上肢に歯車現象陽性の筋強剛と、3~4 c/s の振戦を認めた。意識障害はその後消失せず、昭和51年2月に入ると、項部強直、瞳孔左右不同症、*gland-mal type* の痙攣があり、意識障害もこの頃から急速に悪化。2月17日呼吸不全で死亡した。リコール検査は3回施行、いずれも高度の蛋白増加、軽度の細胞増多 (リンパ球) があり、培養を含めて、真菌、細菌、結核菌は証明されず、*aseptic meningitis* と考えられた。ウイルス抗体価は抗補体作用のため検査不能。

剖検所見では、主病変は肺にあり、両側下肺葉中心に空洞形成を伴う。肺線維化と高度の感染性変化が認められた。脳は表面に軽度の混濁腫脹あるも特異的な所見ではなく、*micro* では、小脳、中心回、アンモン角に接する髄膜に局限性のリンパ球中心の細胞浸潤を認めたが、病理学的にも真菌、細菌の証明はできなかつた。細小動脈の *fibrinoid* 変形、血栓形成等の *Lupus encephalitis* の所見は見られず、*cortex*, 白質、基底核にも著変は見出し得なかつた。以上、SLEの経過中に、筋強剛、振戦等の一見 *Parkinsonism* 様症状、*aseptic meningitis* と思われた項部強直、瞳孔左右不同症、痙攣等の神経症状を認めた1剖検例を報告し、文献的考察を加えた。

10. 正常ウサギ血清中の銅および亜鉛含有量とその比

(内科) ○竹内富美子
(無機化学) 岩佐 霏子

生体内の微量金属に関しては、最近注目されるようになったが、ウサギ血清中の銅および亜鉛の含有量については知られていない。

演者らはさきに健康人の血清中の銅および亜鉛の含有量について報告したが、今回、正常ウサギ血清中の銅および亜鉛の含有量について、前回と同様に原子吸光分析

法を用いて検索したので報告する。

使用したウサギは、体重 2.4より 3.0kgの正常ウサギ20匹で、直接、心より採血し血清を分離した。

この血清銅および亜鉛の測定法は前の報告のごとく、原子吸光分析法の標準添加法によつて行なつた。

この測定結果では、ば常ウサギ20匹の血清準の平均値は 71 ± 27 (S.D.) $\mu\text{g/dl}$ で、血清亜鉛の平均値は 155 ± 33 (S.D.) $\mu\text{g/dl}$ であり、血清銅および亜鉛ともに、平均値 \pm S.D. の範囲にある例数は75%あり、対数正規分布を示していた。また、血清銅と亜鉛の比の平均値は0.47を示した。

この正常ウサギの平均血清銅値は健康人のそれに比し低値を示していたが、正常ウサギの平均血清亜鉛値は、健康人のそれに比し約 1.5倍の高値を示した。

11. ウサギにおける銅、亜鉛皮下注射後の血清銅および亜鉛値の変動について

(無機化学) ○岩佐 霏子
(内科) 竹内富美子

正常ウサギに銅または亜鉛を皮下注射し、その血清銅および亜鉛含有量の経時変化を追跡した。

ウサギは体重 2.5kgから 3.0kgのオスを使用した。投与金属は硫酸銅溶液 (銅 1.6mg/ml) または硫酸亜鉛溶液 (亜鉛 6 mg/ml) を使用し、投与属総量は体重 *pro kg* 銅 8.2mgと 9.6mg, 亜鉛18.0mgと36.0mgであつた。

血清銅および亜鉛値の測定は、原子吸光分析法により行つた。

銅または亜鉛を投与した直後は、血清銅または血清亜鉛濃度は正常値の2倍から5倍に増加し、その後は次第に減少し、約2週間後正常値に回復した。

銅投与後の血清亜鉛または亜鉛投与後の血清銅は、投与された金属により影響を受けず投与後も正常を保つた。

これらのわれわれの実験結果からは、ウサギ血清銅と血清亜鉛の間には拮抗作用はないように考えられた。

12. [症例検討会] 胃静脈瘤をきたした慢性肝炎の1例

(司会) 竹内 正 教授
追つて全文を本誌に掲載する。

13. [綜説] 12ヵ月未滿乳児開心術 100例の検討

(心研外科) 今井 康明
心臓外科の進歩に伴ない開心術の手術成績は最近著しく良好となつてきたが、いまだ12ヵ月未滿例の手術成績は不満足なものである。